

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：24402

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720161

研究課題名（和文） 古代文献における子音韻尾字音仮名を中心とした萬葉仮名の研究

研究課題名（英文） Research of Manyō-kana which has a consonant syllable at the end in the literature of ancient Japan

研究代表者

尾山 慎 (OYAMA SHIN)

大阪市立大学大学院文学研究科特任講師

研究者番号：20535116

研究成果の概要（和文）：古代の漢字による日本語表記において特徴的な仮名文字である略音仮名と二合仮名を取り上げて、その動向を追跡・考究した。この研究を通じ、仮名が一字一音節を指向するという従来漠然と知られてきたことをより一層確実に裏付けた。本研究は、単に仮名の使用度数の統計や文字列上の位置を測るだけのものではなく、ある語や文をどのようにして書くのかという、古代の言語活動の、書記に関わる側面のその根本を子細に描出しうるものである。

研究成果の概要（英文）：In ancient Japan, the feature when writing Japanese using a Chinese character (*nigou-kana* and *ryakuon-kana*) was researched. It was clearly known by this research that one kana comes to have one syllable. This research does not only measure the frequency in use of kana, and is not only what investigates that position used. In ancient Japan, the method and actual condition how to write a word and a sentence are clarified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000円	390,000円	1,690,000円
2010年度	400,000円	120,000円	520,000円
2011年度	700,000円	210,000円	910,000円
年度			
年度			
総計	2,400,000円	720,000円	3,120,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：子音韻尾字 略音仮名 二合仮名

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は日本語書記とその文字に感心をもっているが、ことに資料的にさかのぼれる最古期にまずはその研究対象を据えた。その古代～中古日本として区分される奈良時代（およびそれ以前）と平安時代以降とを分けるひとつの確固たる指標がある。それは漢字専用時代とそうでない時代という弁別である。奈良時代以前には、日本語を表記す

る場合、漢文か、あるいはその変則的な形、および表音的に使う萬葉仮名をもって書記されていた。この萬葉仮名は、のちの平仮名、片仮名（以下、一括する場合は「カナ」と片仮名表記にして代表させる）と基本的に同様の働きをするものだが、書体が実字としての漢字と同一である点に大きな違いがある。つまり、奈良時代に綴られた文字列とは、単純に字体だけでいうならば一種類である。ゆえ

に奈良時代は漢字専用時代とされる。対するカナはその萬葉仮名を草書化あるいは一部分を取り出すという方法にて生まれ、漢字とは別体系の文字として位置づけられるようになっていき、すべてをこのカナで書いたり、あるいは漢字仮名交じりで書いたりするようになる。このように、漢字専用時代とそうでない時代を分ける鍵は、萬葉仮名とカナという二者の存在であるが、カナは萬葉仮名から生まれたものであって、つまり、文字使用において分別される象徴としてある二者は血脈としては通じている。ただし、萬葉仮名で使われていた字母がすべてカナに引き継がれているわけではなく、明らかな淘汰があることが資料的事実より判明している。よって二者は、相通しながらも相違する体系を呈すというおよそ単純に捉えがたい関係にある。そして近年、この二者の関係を問う研究が顕著になっており、漢字専用時代とカナを持つようになった時代との対照的考究が、古くからいわれてきた奈良時代から平安時代へという、この国がかつて迎えた大きな文化的変異の展相を精密に解析する有力な視座として示されつつある。その際に、萬葉集をはじめとする上代の各種文献はもちろん、木簡や正倉院文書といった転写を経ていない一次資料も欠かせない手がかりとして存在感を近年示している。萬葉仮名はいかにしてひらがなになったのか。そのとき、どれだけのものが継承され、そしてどれだけのものが捨てられたのか。単なる書体の変更だけではない、用字上、表記上の機能の差異を明らかにしていく必要性が示されてきている。

漢字専用時代とは、日本語を書くにあたって文字が漢字において他になかったということである。そしてカナが生まれてからは、漢字とカナという選択肢を得たということになる。その意味では、前者の時代は、漢字だけが文字言語としての日本語を成り立たせていたとすることができる。従ってこの時代には、カナが生まれて表記にあらたな選択肢が増えた時代に比して何らかの異なるものが内包されていると考えなければならない。換言すれば、カナは、“漢字が成り立たせていた日本語”に大きな変動をもたらした存在である。こういった従来明らかになっている当時の日本語書記の実態に照らして、本課題では、文字、表記を通して“漢字が成り立たせていた日本語”から次代の“カナが拓いた日本語”への連続と不連続を明らかにし、歴史上、日本語および日本の文化が経験した大きな変相の実態を書記資料とその解析という観点から位置づけるという目標を掲げることとしたのである。すでに夙にいわれてきた平安時代と奈良時代以前という対照—つまり国風文化の起こりとそれ以前、中国文化の内面化と吸収咀嚼段階・・・様々に

示されてきた対照関係にあって、漢字専用時代とカナが生まれた時代という、文字、表記から切り込んだ連続不連続を研究視座に据えることで、より精密に当時の実態を見定めることができると考える。

## 2. 研究の目的

古代日本は、中国をはじめとして当時最先端の知識や技術、文化を食欲に吸収し、かつ柔軟にそれらを咀嚼して自らの文化を育ててきた。それは書記活動においても例外ではない。文字を持たなかったため、言葉を書き記すということ自体、外部に求めるほかなかったものであり、そのときに出会うのは事実上選択の余地は無く中国語とその表記であった。これをまさに「吸収」・「咀嚼」し、自分のものとしたのであった。外国語のために生み出された外国語の文字を日本語に取り入れ、自家薬籠中に納めるに至ったといえる。漢字は、日本の他にもインドシナ半島にまで至る東アジアの広範囲に伝播したが、日本ほどに独自の使用に昇華させ、かつ今日に伝える国は他にない。世界の古代四大文明はそれぞれに文字を持っていたが、そのうち甲骨文字だけがその血脈を途絶えさせておらず、漢字へと連続している。それがさらに東端の異国に伝わって独自の展開を遂げたことは誠に希有なことであるといわねばならないし、日本という国家、文化の形成と発展にあって、文字による統治と人間交流がそれ裏付けたことを思えば、漢字を抜きにして日本語は語れず、そして漢字で書かれる日本語を抜きにして、日本文化は語れないといってよい。よって、日本語、日本文化が記録されるその黎明ともいべき時代はより深く考究されなくてはならない。

古代の日本語資料における漢字（仮名・訓字）が、いかにして次代のカナ、あるいは漢字仮名交じりへと連続するかを精密に究明するのが総体的な目的である。萬葉仮名とカナというあたかも血肉をわけた兄弟のような由来をもちながら、その働きには大きな違いがあること—つまり萬葉仮名にあって、カナにはないもの、あるいはその逆、そしていずれにも共通するもの。それらを分析することで萬葉仮名からカナへの階梯をみるのである。

日本語は、書記手段があること自体を知ったその最初においては当然漢文しか知らなかったはずだが、古代のある時期以降より、漢字を表語—すなわち訓、そして表音の両方で用いるようになる。時に単独、時に混交といういわば自在なありようは後代に日本語書記がどのように“標準”を獲得していくのかを知る上で重要な手がかりとなる。このように常に仮名（すなわち表音）と、訓字（すなわち表語）との関係を注視しながら検証を

行うのは、通史的にみた場合の表音文字の連続性と不連続性（淘汰）、表語文字の連続性と不連続性（淘汰）というそれぞれの潮流を明らかにし、それらが、いかに並行的で、いかに交差的かを見定めたいことによる。そのために、本課題では代表として略音仮名と二合仮名を中心に仮名の淘汰と継承を明らかにすることにした。略音仮名はいわば典型的な仮名なのであるが、二合仮名というのは仮名という名が付いているものの、表語的な用い方をされる場合がままあり、表語と表音の間にあるような存在である。「作」でサクという音節を表す、つまり一字で二音節を表すために、一字一音節を指向した奈良時代末期に向かって実質的にこの種の仮名は淘汰されるが、付属語表記においては『古今集』や『源氏物語』をはじめとする中古文学作品に散見する。しかしこれは奈良時代ものが継承されていると単純に言うて良いことなのかは検証の余地がある。つまり漢字専用時代に、同字形の漢字の文字列に混じって記されていた場合と、カナに混じって使われている場合の意味をどう捉えるかということである。同じ音節を表すのであっても、その用字意識の違いを明らかにしなければ、その後使われなくなる意味も見えてこない。

一方の略音仮名は二合仮名と出自を同じにしつつ、韻尾以下を切り捨てて一音節として使われる点に大きな違いがある。萬葉集では「佐」や「加」などもとより子音韻尾を持たない字と一見分け隔てなく使われているように見える。しかし、同時代の散文資料である『古事記』では入声字（p,t,kで終わる）を元にした仮名が一切使われないという特徴があり、また『日本書紀』でも偶然とは言いがたいかなり徹底した忌避が認められる。そういう点では萬葉集における相当量の使用とは何を意味するのか、といったことも問題になる。また、本来的には仮名が補助的な役割に位置すると考えられる萬葉集訓字主体表記において、この略音仮名は実に二〇〇〇例以上使われており、その存在感は決して小さくない。略音仮名を対象に据えれば、仮名を仮名主体で使うことと、仮名を訓字主体で使うことの意味の違いをはっきりと比較検証することができる。

以上のことを通じ、仮名と訓字という、漢字を使って日本語を書くという当時の書記の実態をより精密に描出する。

### 3. 研究の方法

子音韻尾字という日本語表記には本来適さないとされる仮名を取り上げ、この字音仮名がどのような盛衰を見せるか追求する。あわせて他の仮名やあるいは訓字等との関係も問うた。古代の日本語表記について、「漢字を多彩に使う」、ということそれまでになっ

てしまうわけだが、その多彩さはどういった選択の結果なのかを明らかにする必要がある。もともと字音として有標である子音韻尾字音仮名はそのことを分析する手がかりとしてふさわしい。研究では大きくわけて次の四点から臨んだ。

#### (1) 略音仮名の動向と盛衰

略音仮名が、どういった環境で用いられているのか。どういった語の表記に頻用されているか。同じ子音韻尾字であるところの二合仮名との関係はどうなっているのか。これらを調査することで、いわば“仮名になり得た”子音韻尾字の実相を同定するとともに、仮名が使われる環境、条件ということにも迫る。

#### (2) 二合仮名の動向と盛衰

これまでの調査で、二合仮名は比較的同語表記に繰り返し使用される場合と、単発的使用の場合とがある。その関係性を問うこととともに、このとき、同じ語を他の表記ではどのように記されているかを精査し、これにより、“仮名になり得なかった”子音韻尾字—二合仮名のより厳密な位置づけを行う。

#### (3) 略音仮名と二合仮名の関係

この二つの仮名は素材が同じ子音韻尾字であって、お互いにどのように競合するのか、しないのかということを経験する。また同一環境にでてくるような場合を特に調査対象とし、両者の機能の差異を明確化する。(1)(2)をふまえ、子音韻尾字音仮名が日本語表記に用いられるその実態をより精密化する。

#### (4) 地名表記

地名表記は八世紀初頭に出された法令により二字表記を余儀なくされた。そのため、一字で複数音節を持つ子音韻尾字音仮名は相当に活躍の機会を与えられたことになる。地名表記に使われるものを精査し、非固有名詞表記の場合といかなる関係にあるのかということ明らかにする。

### 4. 研究成果

2009年には「古事記における子音韻尾字音仮名について—歌謡を中心に—」を発表した。これはそれ以前の研究で古事記を取り上げた際に論じきれなかった歌謡部分について論じ、入声字を避け、また本文中に訓字として用いられている字母を仮名としてしようすることを避けるということを帰納した。同年、「萬葉集における非固有名詞表記二合仮名の機能について」にて、二合仮名が語を表記するに当たって、どの部分に該当しているかを精査した前年の学会発表を論文化した。この結果、二合仮名が付属語表記に多く、かつそのことが語構成の明示に寄与している

ことを明らかにした。また、付属語表記でない場合には概して使用は単発的である。

同年、萬葉学会全国大会にて「萬葉集における二合仮名と多音節訓仮名」を口頭発表した。次いでこれを「萬葉集における二合仮名と多音節訓仮名について」として論文化した。ある同じ語を二合仮名と、訓をもとにした他音節の訓仮名で書くとき、それらは競合しない関係になっている。つまり、二合仮名で主に書く場合であれば、たとえ訓仮名を使う場合があってもごく稀であり、逆に訓仮名で主に書く場合は二合仮名で書かれることがあってもごく稀である。両者は機能が似通っているとこれまで漠然と把握されてきたが、明らかに棲み分けがあることを指摘した（刊行は2010年）。

2010年は、これまでテーマとしてきた子音韻尾字音仮名が地名表記においてどのように使われているかを検証した。結果、一般語を記す場合とは異なる選択可能性から字母が選ばれていることが判明した。つまり、萬葉集内の非固有名詞表記に使用される二合仮名は、地名表記にはほとんど使われないのである。調査としては萬葉集記載の地名を中心に、二篇の論にこれをまとめた。「萬葉集所載地名表記における二合仮名—非固有名詞表記との関係をめぐって—」、「萬葉集における地名表記と子音韻尾字—非固有名詞をもたない二合仮名—」（刊行は2011年）。

また、略音仮名と二合仮名という二つの形態に両用される字母の在りようを検証したものを「二合仮名と略音仮名に両用される字母を巡って」に論じた（刊行は2011年）。ここでは、ある一つの子音韻尾字が、二合仮名と略音仮名の両方で頻用されることがなく、競合が押さえられているということを帰納した。

2011年には、「萬葉集における「千遍」の訓を巡って」にて、二合仮名と訓字の読みで揺れる、「千遍」表記の「チヘニ」と「チタビ」を巡って考察した。訓詁の問題にも触れつつ、これまで揺れていた読みを一つに定めることができた（刊行は2012年）。

また「二合仮名の定位」にて二合仮名の二面性についてあらためて問い直し、他表記との交代について検証した。ことに、二合仮名が明らかに衰退するいわゆる萬葉集第三期～四期においてどのように他の仮名と交代しているかということを経査した。また新たに学会で提唱された用字法と表記法という概念を導入し、書き手と読み手それぞれからの視点で二合仮名を把捉し、その位置づけを試みた。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

- (1) 「二合仮名の定位」尾山慎／単著 査読有り『文学史研究』第52号 1頁～14頁 2012年大阪市立大学
- (2) 「萬葉集における「千遍」の訓を巡って」尾山慎／単著・査読有り『国語語彙史の研究』第31集 127頁～146頁 2012年 国語語彙史研究会
- (3) 「萬葉集における「道」「路」「径」」尾山慎／単著・査読有り『美夫君志』82号 13頁～26頁 2011年 美夫君志会
- (4) 「二合仮名と略音仮名に両用される字母を巡って」尾山慎／単著・査読有り『萬葉語文研究』第6集 109頁～133頁 2011年 和泉書院
- (5) 「萬葉集における地名表記と子音韻尾字—非固有名詞をもたない二合仮名—」尾山慎／単著・査読有り『国語文字史の研究』第12集 17頁～35頁 2010年 和泉書院
- (6) 「萬葉集所載地名表記における二合仮名—非固有名詞表記との関係をめぐって—」尾山慎／単著・査読無し『古典語研究の焦点』91頁～116頁 2010年 武蔵野書院
- (7) 「萬葉集における二合仮名と多音節訓仮名について」尾山慎／単著・査読有り『萬葉』207号 32頁～51頁 2010年 萬葉学会
- (8) 「萬葉集における非固有名詞表記二合仮名の機能について」尾山慎／単著・査読有り『萬葉』205号 48頁～66頁 2009年 萬葉学会
- (9) 「古事記における子音韻尾字音仮名について—歌謡を中心に—」尾山慎／単著・査読有り『文学史研究』第49号 18頁～30頁 2009年 大阪市立大学

〔学会発表〕（計2件）

- (1) 「千遍の訓を巡って—チヘニとチタビ—」尾山慎／単独 2011年4月23日 第97回国語語彙史研究会 於・近畿大学
- (2) 「萬葉集における二合仮名と多音節訓仮名」尾山慎／単独 2009年10月25日 平成21年度 萬葉学会（学会全国大会） 於・九州国立博物館ミュージアムホール

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

尾山 慎 (OYAMA SHIN)

大阪市立大学大学院文学研究科特任講師

研究者番号：20535116

### (2) 研究分担者

なし

### (1) 連携研究者

なし